

禅の友

Zen no Tomo

5

May 2019

特集
お仏壇





ご本山だより 大本山永平寺

【新到掛搭式】 しんとうかたしき

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三二〇二



皇月の永平寺は新緑の香りに包まれています。

永平寺をお開きになりました道元禪師さまは、二十代の頃、お師匠さまを求めて中国（宋）へ渡られました。風の力で進む船で向かうのですから、命がけの旅であつたでしょう。

中国へ渡り入国を許された道元禪師さまは、方々のお寺をまわり、ついに
お師匠さまとなる如浄禪師にょじょうさまと出会います。その出会いは五月一日のことであつたそうです。

国も時代も違いますが、もしかするとこんな新緑の茂る季節にお二人が出会われたのかなあと思いを巡らしているものであります。

さて、永平寺では、毎年五月一日になりますと、春先に入門してまいりました新到の雲水方が、見習い期間を終え、古参の者たちと等しく肩をならべて修行に入るための、「新到掛搭式」
しんとうかたしき

が行われます。新到掛搭式では、一番に永平寺の門を叩いた者が新到の雲水を代表して掛搭状を読み上げます。大きな声で活き活きとしたその声を聴いておりますと、なんだか力が湧いてまいります。

五月は私たちにとって修行の始まりであり、出逢いの季節であります。

濁りなき心の水にすむ月は
なみもくだけで光とぞなる

道元禪師さまの坐禅のお歌です。湧き起こる思いを手放した、静かな心の水に映る月は、本物の月をそのままにうつします。

身と心を投げ入れて、一心に修行する雲水方の姿は、歴代のお祖師さま方と何も変わらない仏さまのお姿そのものです。

深山幽谷に生いる木々に見守られながら、雲水方は坐禅修行に身心を投げ入れます。



ご本山だより

大本山總持寺

【学校授戒会じゅっかいえと制中五則せいちゅうごそく】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八・六〇二一



大布薩講式

五月七日から八日にかけて恒例の学校授戒会が行われます。

これは、総持学園鶴見大学附属高等学校の三年生が本山に一泊して坐禅もんぜんや聞法もんぽうを行い、仏さまの教えを学びます。そして最後に江川禅師さまから親しくご戒法を授けていただく、という大切な行持です。特に今年は、四月二十八日から五月六日まで九連休とな

っておりまので、学生たちにとっては連休明け直後に授戒会を修することとなります。

また總持寺では、四月より修行に専念し自己の研鑽に努める夏安居げあんじ制中期間に入っております。制中は年に二回行われ、ともに一〇〇日間続きます。今夏制中において、五月の十三日から十七日にかけて「五則」という行持

が行われます。五則中に行われる行持は、楞嚴会りやうげん啓建えいけん・土地堂念誦どじどうねんじゆ・法堂はつどう並びに僧堂人事行礼そうどうにんじぎやうらい・巡察じけんさう・大布薩だいふさつ講式かうしきなど曹洞宗の歴史と伝統を相承した重要なものばかりです。

曹洞宗の古き伝灯を正しく相承し、後世に伝えて行くことも、修行の眼目といえます。

そのクライマックスが十七日に行われる「首座法戦式しゆそほっせんしき」です。今夏制中の期間、修行僧たちの先頭に立つ首座和尚が禅師さまの命を受け、二十五名の修行僧と法戦問答を行います。

法戦式は、緊張感みなぎる真剣勝負の大問答です。首座和尚は全力量を挙げ、これに臨み、千畳敷の大祖堂だいそどうに問答の声が交差し響き渡ります。

選・坊城俊樹

亡き人の夢ほんのりと日脚伸ぶ

静岡県 堤千春

評

「日脚伸ぶ」という季題は、ゆっくりと春になりつつ、夕方の訪れが伸びてゆく雰囲気という。まさに「ほんのり」とした夢の記憶として、亡き人の面影を忍ぶのに見合った時間だと思う。

枝振りは千手観音大冬木

滋賀県 五十嵐 勉

評

まことに大胆な発想である。枯れきっていて、千本も万本もあるような枝を大きく広げている大樹の姿を千手観音にたとえた。そういわれてみると、たしかにそんな気がしてくるから不思議である。

◆ 涅槃図の象の涙目母ぢやの忌

奈良県 竹村 和成

◆ 川涸れて太平洋の深眠り

三重県 苅屋 奈良美

◆ 花筒を床の間に伏せ寒に入る

埼玉県 松枝 勝一

◆ 針供養母の真似事針持ちて

新潟県 大橋 恒次

◆ やはらかく混み合うてゐる花筏

大阪府 柏原 才子

◆ 初御空真青なりて平らけし

神奈川県 池亀 恵子

◆ 風立ちて飛び交ふ鳥か花辛夷

埼玉県 橋本 永子

◆ 笹鳴の疎林に深く日の差して

静岡県 清水 康博

◆ 天空へ祈り届けとどんど焼き

愛媛県 能仁 めぐみ

◆ 晩春の白バラ映えて夜のあかり

サンパウロ 斉藤 明子

選者吟

円墳の地下に余寒の剣あり

俊樹

作句小見

円墳とはかなり古い古墳であろう。その地下には今でも王族の剣が埋葬されているという。地上はそろそろ春の訪れだが、地下はまだまだ冬の寒さが残っているのではないかと思った。

選・長澤ちづ

寒の夜の妻の長湯が気になりて湯のはねる音耳すまし聞く

三重県 西村 廣視

評 寒い時期、高齢者が浴室で倒れたという話をよく聞く。入浴中の妻を気遣う作者である。濃やかな配慮を感じさせる「湯のはねる音」という具体が効いている。老夫婦の冬の静かな暮らしぶりが伝わってくる。

彼岸期に播かん蝦夷菊の種子を選る小火鉢寄せて指かざしつつ

岩手県 穴戸さとる

評 種を播こうとするお彼岸が近いことが、上の句から窺える。春を待つ心の弾みが「播く・選る・寄せる・かざす」という四つの動詞の重なり表れている。

◆ ありたけの手作り雛並べては置き替え向き替え独りに耐える
兵庫県 前田 あつ子

◆ 間引かれし養殖若布を茹であぐる厨の窓は雪に明るむ
岩手県 阿部 照子

◆ 先ず最初天麩羅たのしむ蔭の木陰に次々出るを
京都府 小林 靖子

◆ 菩提寺の大きな葉そつと忍ばせて見舞いの文字は多くを書かず
長野県 南山 時子

◆ 高波に打ち上げられし針千本虚ろな瞳に映る白波
鳥取県 山本 浩一

◆ 過ぎしこともう忘れよう大根の少し伸びるに土寄せてゆく
岐阜県 後藤 進

◆ 吹雪の夜わが家の軒に山鳥の宿るやささき羽根を残せり
福島県 西木 甚

◆ 境内の焚火の火の粉あびながら二年参りを孫子と果す
長野県 両角 徳子

◆ 音だけで見えぬ力に怯えたり葉末の風は馴染みしものを
埼玉県 新井 巳喜雄

◆ 握り飯二つ重ねたほどの雪だるま初に雪見た曾孫三歳の
山形県 齋藤 弥生

選者詠

水澄めばスクリユーの泡も玻璃の玉 永遠ならざるものを航きゆく
ちづ

作歌小見

前田さんの一首の孤独の紛らわし方にも心惹かれました。手作りの雛であるところがまた良いですね。両角さんの二年参りとは、初詣での形式で、大晦日と午前零時の元旦を挟んで神社仏閣にお参りすること、「果す」に思いが籠ります。